

マシャ・カレコのベルリン —ヴァイマル共和国の「黄金の20年代」から 30年代初めの大ベルリン—

桑原 ヒサ子

はじめに

本稿で注目しようとする詩人マシャ・カレコ(1907年6月7日-1975年1月21日)は、ドイツ文学史で取り上げられることなく、死後30年以上経ってようやく主要な文学事典で二、三行程度、記述されるようになった。同じ時期に活躍したエーリヒ・ケストナーやクルト・トゥホルスキーについては詳細な記述があるというのに。彼女が忘れられた理由を挙げれば、女性であること、ユダヤ人であるためにアメリカへ亡命を余儀なくされたこと、戦後はドイツに戻らず、ドイツの文学活動から距離を取ったことであろう。加えて、彼女のベルリン時代の詩は、時代の空気や大ベルリンの日常生活を若々しく鋭い眼差しで、共感をもち、時には皮肉っぽく、メランコリックに描き出したが、その詩が「時代詩」「大都市詩」とか「大衆詩」として括られ、芸術的価値の高い詩から区別されたからでもある。

ここでは、20年代から30年代始めまでの大ベルリンに暮らす人々を描出するカレコの詩を読みながら、歴史記述から抜け落ちてしまう大都市の雰囲気や人々の心情をくみ取ってみたい。まず、「大都市の風景」、次に「働く人々」そして「困難な社会状況」の順番に進めていく。なお、亡命期に強いられたユダヤ人としての自己認識やベルリンへの憧れ、そして戦後にベルリンを再訪した時期の詩については、稿を改めて論じたい。

まず、カレコの詩がメディアやベルリンの文学界で注目された時代を振り返ってみよう。

第一次世界大戦の敗戦国となったドイツは、戦争責任を押しつけられ、莫大な賠償金の支払いに苦しんだ。1923年に賠償金の支払いが滞ると、フランスとベルギーはドイツ屈指の工業地帯ルール地方を占領する。これに対してドイツは、工場労働者にストライキとサボタージュを呼びかけ「消極的抵抗」で対抗した。しかしインフレは極度に進行し、失業率は28%に達した。一方、帝政から共和政に変わったヴァイマル政府打倒を目指すナチ党など右翼と、中途半端な社会主義革命を批判し、徹底した社会主義国家を樹立しようとする左翼の共産党は、暴力的闘争を繰り返していた。こうした経済的、政治的混乱のなかで、24年に導入された金融緩和策により28年には失業率は5%まで回復する。¹⁾ ヴァイマル政府の努力により国際的地位も改善し、25年にはロカルノ条約により、ヨーロッパにおける安全保障体制に組み込まれ、その翌年には国際連盟への加盟が承認された。

この1924年から、29年10月24日のニューヨーク市場での株価の大暴落から始まる世界恐慌までの相対的安定期は「黄金の20年代」と呼ばれる。この時期、理系分野だけでなく、文学、哲学、芸術の分野でもヴァイマル文化は黄金時代を迎える。

ある種の不安定さを伴いながらも自由な雰囲気の中なかでベルリンは、文学、絵画、演劇、カバレット、映画、建築の本場であるだけでなく、政治ジャーナリズムの中心地、モッセやウルシュタインのような出版帝国の都市でもあった。その担い手についてゴットフリート・ベンは次のように語っている。「芸術や科学や商業の急速な成長を生んだおびただしい刺激の大部分は、住民の一部を構成していたユダヤ人の才能に、彼らの国際的なつながりに、彼らの不断の感受性に、そしてとりわけ質を見分ける彼らの確かな本能に負っていた。」²⁾「ヴァイマル憲法の父」フーゴ・プロイス、外交に尽力したヴァルター・ラーテナウを始め、作家アルフレート・デーブリーンやヨーゼフ・ロート、画家マックス・リーパーマン、演出家マックス・ラインハルト、作曲家ハンス・アイスラー、指揮者ブルーノ・ヴァルター、哲学者エルンスト・カッシーラー、社会学者ジークフリート・クラカウアーなど枚挙にいとまがない。

その黄金の20年代は、世界恐慌の始まりとともに終わりを告げる。ドイツは再び失業者で溢れかえった。1930年初頭に350万人だった失業者は32年には620万人という、就労者の3人に1人に相当する最高値となる。³⁾ 経済状況の暗転は、やがてナチスの台頭を許す素地となっていった。

1. ベルリンのマシャ・カレコ

まず、マシャ・カレコが詩人として脚光を浴びるまでの経歴を簡単にまとめておこう。⁴⁾ 第1詩集の冒頭に自分の来歴を振り返る詩がある。

私自身にインタビュー

教会が1つ、医者が2、3人
そして大きな精神病院が1つある
噂話が好きな小さな町に
私が生まれたのは、そう昔のことではない。

子どもの私がいちばん口にしていた言葉は「いや」だった。
私が母のお気に入りの子でなかったことは疑いない。

— そして、あの頃を振り返れば、
私が自分の子どもであったらなんて思いもしない。

先の世界大戦中に、私が入学したのは
マイ先生が校長の第8教区学校だった。

— 戦争が終わったら、平和になると
相変わらず考えていた頃は、もう12歳になっていた。

2人の上級教諭は私に才能があると認めたが
まもなくすると、それを理由に—教育のためだからと—私を遠ざけた。
けれど、中学校で私たちが学んだことのなかに、
「人員削減」はなかった。

卒業の時に、先生は若者の苦難
とモラルの維持について語った。—
つまり、私たちは今や人世に踏み出すことになったということ。
しかし、残念ながら私が踏み出した先は、ただのオフィスだった。

8時間勤務に雇用され
それで、低賃金で勤めを果たす。
夜には詩を作ることもある。
(父曰く、無益なことだ。)

天気のいい日には、ちょっと旅行をする
カラー地図の上を鉛筆でたどりながら。
— でも、静かな雨の日々は
世間でいう幸運を待つこともある…

カレコは、1907年にオーストリア＝ハンガリー帝国の領地であったガリチア地方フ
シャヌフで、ゴルダ・マルカ・アウフェンとして生まれた。父フィッセル・エンゲルは
ロシア国籍をもつユダヤ人商人で、母ロザリーア・ハヤ・ライゼル・アウフェンはオース
トリア系ユダヤ人だった。マシャが父に認知されてマシャ・エンゲルとなるのは、のちに
両親が正式に結婚する22年のことだった。

第一次世界大戦が始まる1914年に、3歳年下の妹と家族4人はドイツへ移住する。理由は、ロシアや東欧で打ち続いたポグロムから逃れるためであったが、戦争で妻の親戚を敵に戦うことを恐れたとも考えられている。家族はまずフランクフルト・アム・マインへ行くが、父はロシア国籍が理由で敵性外国人とみなされ抑留される。16年に母は娘2人とマールブルクへ引っ越し、そこに釈放された父がやって来る。妹の誕生以来、母親の愛情が妹に注がれたため、母親にとってマシャは反抗的な娘だった。そして第一次世界大戦後、父がベルリンに職を得て、家族はベルリン・ミッテ区のシュパンダウアー・フォアシュタットにある、いわゆるショイネン地区に住んだ。このオラーニエンブルク通りの新シナゴークが建つベルリンの中心界限には、東部ヨーロッパからやって来た比較的貧しいユダヤ人が住んでいた。1880年代以降、そしてロシアのポグロム後、大勢のユダヤ人移民がドイツにやって来て、その多くがベルリンに留まり⁵⁾、すでに第一次世界大戦以前にベルリンにはドイツ最大のユダヤ教区が存在した。というのも、1871年に誕生したドイツ帝国は、ユダヤ教徒とキリスト教徒に同じ権利を与えたからである。しかし、同化したドイツ系ユダヤ人と、ポーランド、ロシア、ガリチアから移住してきた正統派の東部ユダヤ人との間には共通点はわずかしかなかった。東部出身のユダヤ人には極端な宗教観、貧困、スラム街のイメージがあり、リベラルな西部ユダヤ人にとって蔑視の対象だった。そんなこともあって、のちにカレコは自分の出身地をロシアの父の出生地と偽っている。

1918年から23年まで、マシャはベルリン・ミッテ区のカイザー通りにあるユダヤ教区の伝統ある女子校に通った。詩の第3連にある「先の世界大戦」は、もちろん第一次世界大戦のことである。文章を書くのが得意な成績優秀な生徒だったが、中等教育終了後は、父の反対にあって大学へ進学することはできなかった。マシャが卒業した23年10月のドイツはハイパーインフレーションにより高い失業率に苦しんでいた（第4連の「人員削減」はこの時期のことを指している）が、マシャは24年からベルリン・ミッテ区のアウグスト通りにある「ドイツ・ユダヤ人組合労働者福祉局」の事務員として働き始める。ヴァイマル政府が導入した8時間労働だったが、給料は低かった。20年代の若い女性事務職の働きぶりは、小文「タイプライター嬢」⁶⁾のなかに生き活きと描かれている。自由時間には読書や詩作、そして聴講生としてレッシング単科大学とベルリン大学の夜間コースで哲学と心理学を勉強した。28年、マシャは10歳ほど年上のヘブライ語講師Dr. サウル・カレコと結婚する。

一方、勤務が終わると、カイザー・ヴィルヘルム記念教会の向かいにあった芸術家カフェ「ロマーニッシェス・カフェ」(1916年開業)⁷⁾に通った。数百人の客席をもつこのカフェには、画家やとりわけ数多くの作家、当時ベルリンに住むほとんどの作家が規則的に、あるいは時折は顔を出す溜まり場だった。カール・ツックマイアー、デーブリーン、ベン、

ケストナー、ベルト・ブレヒト、エルゼ・ラスカー＝シューラー、ヨアヒム・リングルナッツ、ガブリエレ・テルギットらがそこにいた。ベテラン作家であろうと、チャンスを狙う駆け出しであろうと、できあがったばかりの詩や小説を、このカフェにやって来る新聞の関係者に提供し、大出版社の企画担当者と交渉することができた。

マシャもここで20年代終わりに文学的ボヘミアンに接触する。1929年、22歳の時にベルリン方言で書かれた詩2編「俗人の春の目覚め」と「二つの窓の間で」⁸⁾が文化芸術誌「断面」に掲載されると、翌30年からは評判の高いウルシュタイン社の「フォス新聞」やモッセ社の「ベルリン日刊新聞」に定期的に詩が掲載されるようになる。そのほか「テンポ」「ベルリン月曜ポスト」「ジンプリチシムス」といった雑誌にも詩は載った。31年から32年にかけて週刊新聞「ヴェルト・アム・モンターク」に毎週月曜日に詩を1編提供する契約が成立する。ラジオで詩を朗読し、記念教会に近いブダペスト通りにある「キューカ」(キュンストラー・カバレット＝芸術家寄席の略語)の舞台上で朗読したり、カレコの詩やシャンソンをクレール・ヴァルドフ、ローザ・ヴァレッティやアネマリー・ハーゼといった女優で歌手たちが朗読したり歌ったりした。

カレコがキーペンホイアー出版社の文芸欄業務課と契約を結んだことで、彼女の作品はドイツ語圏の新聞や雑誌、すなわちオーストリア、スイス、チェコスロバキアでも印刷されるようになった。マシャ・カレコはわずかな年月の間にベルリンの文学界の重要な一員となり、そしてカレコ夫妻の経済状態はマシャの詩作収入により大きく改善したのだった。

カレコの詩集を出版することになるローヴォルト社の企画編集顧問で作家・翻訳家のフランツ・ヘッセルとの出会いも、ロマーニッシェス・カフェを通してであった。本稿で対象とする詩は、20年代にさまざまなベルリンの日刊紙や文芸雑誌に掲載された詩を集めて、亡命以前に出版された詩集『叙情的速記ノート 日常についての詩』(1933年、ローヴォルト出版社、初版5,000部、36年末の第4版で11,000部)と『大人のための小説本韻を踏んだものと踏まないもの』(1934年、ローヴォルト出版社、初版3,000部、35年の第2版6,000部)から選択した。ユダヤ人や共産主義者による「反ドイツ的」書籍をベルリン大学前のオペラ広場(現ベーベル広場)で学生たちが焼き捨てたのは1933年5月10日だったが、その年の1月に出版された『叙情的速記ノート』は焚書の対象にならなかった。カレコがユダヤ人であることはまだ知られていなかったのである。しかし、1937年1月9日のエルンスト・ローヴォルトに宛てた全国著述院会長ハンス・ヨーストの手紙は、カレコの詩集が「有害で望ましくない書籍リスト」に載ったことを伝え、直ちに書籍販売を中止し、流通している書籍の回収を命じた。これ以降カレコは、ユダヤ人向けメディア以外での著述活動は、禁止されることになる。

2. 大都市の風景

1871年のドイツ帝国誕生時に90万人だったベルリンの人口は、高度工業化によって増加し続け、住居と工業用に周辺の土地が必要になっていた。しかし、利害関係から合併は進まず、ようやく1920年4月27日に交付された「新ベルリン自治体構築法」により、8都市(ベルリン、シャルロテンブルク、ケーペニク、リヒテンベルク、ノイケルン、シェーネベルク、シュパンダウ、ヴィルマースドルフ)、59の町村、27の領地地区が合併して巨大自治体「大ベルリン」が誕生することになった。これにより、190万人まで膨らんでいたベルリンの人口はさらに190万人(そのうち120万人は7つの周辺都市に住んでいた)が加わり380万人となり、ロンドン、ニューヨークに次ぐ世界第3位の大都市となった。面積は878km²でロサンゼルスに次いで第2位であった。⁹⁾

さまざまな都市改造計画が着手されたが、その一つは交通網だった。大ベルリンでは鉄道の電化が進められ、Sバーン(=Stadtbahn、市内循環線や都市と近郊を結ぶ都市鉄道)がはりめぐらされ、地下鉄(1925年以降拡張が始まるも29年の世界恐慌以降中断)や市電バスの接続が図られた。ベルリン市民は公共交通を使って、安価で迅速な移動が可能になった。

終業後の帰宅

時計が午後7時を打つと、

千もの扉から、疲れて青ざめた大都会の人々が流れ出てくる、

目には日常生活の心配事、くたびれた手にはカバン、

しわくちャのポケットから素早くSバーンの定期券を取り出し、

自動販売機に映る自分の姿を一瞥し、

(時にはさらに自動販売機のアーモンド菓子に1グロッシェン硬貨を投入することも
ある—)

新聞スタンドで、最新の夕刊から

太字で印刷された見出しを盗み見る…

ビュービューと—低俗な南太平洋小説から吹いてくる荒涼とした風のように—轟音を立ててSバーンの長い車両が近づいてくる。

車両のなかの空気は湿っぽく冷たい、それに待合室の匂いがする。

—5分間の居眠りをする疲れた男たちが奇妙にこっくりし、

終点の夢をみて、驚いて窓の方を見る。

一金髪のカップルが幸せそうにぴったりと隅っこにもたれている、
大勢の乗客の会話がとぎれとぎれに時々耳に入ってくる…
—ウイキョウを練り込んだ細長いパンをかじりながら、痩せたギムナジウムの生徒が
夜間授業のために急いでもう二つ三つ新しい動詞の練習をしている。
…二三分ごとにガタンと音を立てて、列車は辛抱強く停車する
二三人の人々を降ろすために。
新たな疲れた目が急いで座席を手に入れる。

銀色のレールの上をさらに大都市のまっただ中を進んでいく。
冬の闇が殺風景な集合住宅の上空に凍えたように横たわり、
公園のところでは、とくに落葉した樹が影のように踊りながら通り過ぎていく…
道路の上方にロープでつながったアーク灯が光を放っている、
そしてカラフルでどぎつい電光広告のいくつものまばゆい島が生まれ出る
荒涼とした海のように広がる家並みのなかから——
—露天商たちが、油で汚れた灰色の手押し車をゆっくりと押して帰宅する。
黒板のチョークの文字は半分、拭い消されている。
(曇ったガラス窓に暖かい息を吹きかければ、
時計が午後7時を打つとき、すべてははっきり見ることができる…)

時計が午後7時を打つと、
大都市の家々では、たくさんの子どもたちが両親の帰りを待ち、
たくさんの両親が子どもの帰りを待っている。
子どもたちは扉に聞き耳を立て、母親たちは時計を見る。—
台所の窓の隙間から、温め直した食事の匂いが漏れ、
食器のカチャカチャという音が聞こえてくる。
—ようやく廊下に呼び鈴の金切り声が響き、
扉の鍵がカチャカチャ音を立てる…

ヴァイマル政府は1日8時間労働制を打ち出した。しかし1923年のハイパーインフレ以降、1日8時間労働制は建前として残ったものの、労働時間は9時間ないし12時間に延長させられた。この詩では夜7時に一斉に仕事を終える労働者がSバーンを使って帰宅する姿が描かれている。

詩のなかに描き込まれている小道具も時代のアクチュアリティを映し出している。ドイツでは19世紀末には15,000台の自動販売機でチョコレートやキャンディなどの菓子類を購入できた。¹⁰⁾ 人の往来の多い場所に置かれたから、大都市の駅の風景の一部になっていただろう。スタンドで売られる新聞も、当時の新しい風景である。新聞ジャーナリズムの中心地ベルリンでは、1929年に朝刊45紙、昼刊2紙、夕刊14紙が発行され、週刊新聞も高い発行部数を誇っていた。¹¹⁾ 印刷術の進歩による大量生産で低価格が可能になり、一般大衆が容易に購入できるようになった。また、予約購買だけでなく、新たに始まった街頭販売は、その場で情報を得られるという大都市のテンポにマッチした。しかし、世界恐慌後の経済的困窮のなかで労働者たちは、夕刊の記事のタイトルに視線を走らせるだけで、購入はしない。

詩のなかで唐突に触れられる「低俗な南洋小説」の詳細は分からないが、当時大衆の間で読まれた英語からの翻訳本バジル・ケアリの『危険な島々』や『船長クリスティーネ』、あるいはノルベルト・ジャックの『南洋の5人』など南洋を舞台とした通俗小説が念頭にあったのかもしれない。¹²⁾

車窓から見えるのは、ガス燈に代わって辺りを明るく照らす電気のアーク灯であり、カラフルな電光広告が闇のなかにところどころ固まって浮かび上がり、夜の繁華街のあり場所を示している。

露天商が店じまいして手押し車を押す姿が見える。人々の移動手段は、Sバーンを中心とする公共交通機関が徒歩だった。そのほかタクシーも6,000台近く営業していたが、辻馬車もまだ600台ほど走っていた。一方、貨物輸送には未だに圧倒的に荷馬車が使用されていて、それが1920年代のベルリンの現実だった。¹³⁾

カレコが仕事後に通ったロマーニシェス・カフェはカイザー・ヴィルヘルム記念教会の東向かいに位置したが、クーアフルステンダム（クーダム）から記念教会が建つブライトシャイト広場を経てタウエンツィーン通りに続く界限は、カフェ、映画館、カバレットやヴァリエテが並び、昼間の仕事が終わる時間には娯楽を提供する不夜城となった。

記念教会の7月の夜

建物の屋根は、まるで熱を出しているように燃えている。
大いに称賛される都市の生気が鼓動する。
建物前面の光が刺すように目をくらませる。そしてその上方に高く
現れた満月は、下手に削られて弱々しい。

アイドル映画俳優がクロロドントの広告で
微笑み、衛生的に見える。
実に強烈な修整を加えられた淑女が二三人
映画館の表玄関に色鮮やかな花を添えている。

タウエンツィーン通りの窓は明るくきらめいている。
目的もなく素敵な気分で流れに身を任せて歩くことができる。
そこには何軒かのカフェが、ほんのわずかな緑の植物を豪華に見せて
ツタがからむ「テラス」を装っている。

時々ちょっとした流行歌が流れてくる。
歌に合わせて、どのベンチの下でも足が上下している。
一オールドミスが一人、萎びた顎を落として
とっくの昔の恋を思い出しているに違いない。

なんて不思議だろう、今も遠くになお村々があって、
そこではとっくに真夜中の時刻が打ってしまっているのに、
その時なお私たち自身には、とても素晴らしい夏の夜が
騒々しく、意味もなく長い昼に姿を変えるのだから…

どぎつい電光広告で建物の屋根は熱を帯び、闇夜に浮かぶ満月も色あせるほどだ。人気俳優を使った練り歯磨きの大手メーカーの巨大な宣伝、映画館には誇張された女優たちの看板が立つ。7月の快適な夜には、カフェテラスでビールやカクテルなどの飲み物が楽しめる。開け放された窓や扉から流行の音楽が流れてきて、お金を出せない人も楽しめる。真夜中にぶらぶら歩くだけでも楽しめる場所。その大都市の顔は、まっとうな生活を送る農村と比較されることで際立つ。たしかに魅力的な夜だが、昼間の生産性とは無縁で騒々

しい時間が流れる場所として。

大ベルリンでは急ピッチの都市計画が進む。しかし、近代的な大都市の書き割りの背後には、昔ながらの下町風な場所がまだまだ残っていた。

「カインバーン通り」

私としては、あの小路が大好き、
そこにいると、ただちに家に帰ってきた気がする、
立派な落書きをしたくなる壁と、
ほうろうの表札があって、そこには「ベルント、歯科医」と書いてある。

角を曲がるとすぐに、遠くまで石鹸の匂いが漂う
小さな店が並んでいて、
そしてお隣同士のうわさ話が隙間を通して漏れてくると、
玄関の入り口同士が、黙って反目する。

「うちのエリが時々階段を掃くんだけど、
家屋番号7の男性の娘が ...」
— 未亡人のノイマンさんが興奮して意見を述べている、
彼女はとりわけそれが度を越していると思うと。

中庭では手回しオルガンがカラスの声みたいにしわがれた音で、
金髪の子が惚れた愛しい人の曲を流している。
そして少女たちは、仕事が終わると、
大急ぎで面白いところへちょっと出かける。

肉屋のブロッサさんは一級品しか扱わない。
シュミットおっ母さんの居酒屋にはビールと
それに電子ピアノがあって、
恋人同士のためのクラブ室が備わっている。

ここのひとはまだ急いだり、慌てたりはしない、
角を曲がれば大都市だけれど。

そして車が舗道を飛ぶように走ろうとも、
この静寂を手放す気にはまずならない。

私はカインバーン通りを散歩するのが好きだ。
子どもの頃そうした家々のまえで私は遊んだ、
その家々は古くて、ひと気がなく、それでいて「地方」ではない、
そして新時代に媚びを売ろうとさえしない…

このように、ご近所同士が何でも知っていて、慣れ親しんだ生活のテンポを変えようとしない地区があるかと思うと、大都市は匿名の場所でもある。20年代には何十万人もの人々が仕事を求めてベルリンになだれ込んだ。1925年には少なくとも120万人の男性、10万人を超える女性がホームレス収容施設で生活していたという。32年までに、ヴァイマル政府による生活環境改善の努力があつてその数は半減したものの、世界恐慌の時期には質的量的不満が高まり、間借り人ストライキが起こった。¹⁴⁾

大都市の名も分らぬ小市民の死は、事務的に処理される。故人と親しかった人は一時悲しむが、それでも人間はちゃんと生き続ける。まして、大都市の営みは、歯車の一つでしかない労働者の死に見向きもしない。

小市民の死

ひとが死ぬと、親戚の人々は泣く。
上司はお悔やみの花輪を送り、
故人を誤解していた人々は褒め言葉ばかり。
…死んでしまえば、何の関係もない。

ひとが死ぬと—そして大臣でもなければ—
所属団体の機関誌に短く掲載される。「死亡しました…」
— 戸籍課の所管部局である出生登録課では、
職員が太い抹消線を引く。

古着屋が古い帽子があるか尋ね、
喪の雑誌は、さまざまな提案を送ってよこす。
窓には書いてある「貸部屋あり…」
そして机の上には最後の葉が残っている。

ひとが死ぬと、故人を愛する人々は思う、
これからは何もかもこれまでのように容易に生きてゆけないと。
それでも彼らも「悲しみつつ遺された」に過ぎず、
そしてすべては、定められたように流れてゆく。
— そして時計は止まりすらしない…

3. 働く人びと

公共交通機関のスピードと利便性の追求、1920年代末に始まるアレクサンダー広場の改造など都市計画が実行に移されるベルリンで働く人々について、この項では見ていきたい。

都市建設のために労働者を運ぶ電車や資材を運ぶ車の大都市の騒音、都市建設には労働者には無縁の大金が動く。道路や建物を建設するハンマーやモーターのひっきりなしの響き、それが週日の大ベルリンの姿である。しかし、ヴァイマル共和国になって8時間労働制が保障され—不況のなかでは守られないケースもあったが—、週末は土曜日は午後2時まで、日曜日は休日で、趣味や娯楽など気分転換に充てられる時間が生まれた。

そうした余暇時間の過ごし方として、合唱やスポーツ、菜園などの実践型を始め、サッカーやボクシングなど大衆スポーツを観戦したり、芝居やカバレット、カフェに出かけたがり、映画を楽しんだ。それまでのブルジョワ文化は、観客や参加者層の変化によって20年代の経済回復期に大都市の大衆化文化へと変わっていった。1927年のベルリンには49の劇場があり、75か所のカバレット、20年代には500軒のカフェ、29年時点で363の映画館が24時間営業していた。¹⁵⁾

だからといって安月給の身では、なかなか芝居にも行けない。せいぜい流行歌を聞きに行く程度でも週末の楽しみに小遣いを使い果たし、また仕事の一週間が始まるというのに金欠状態。「月曜日のシャンソン」には大都市のサラリーマンのブルーマンデーが描かれる。

月曜日のシャンソン

月曜日、世界はまだはっきりした姿を見せない、
それで、だれもまともに世界を見るができない。
一月曜日というのは、またしても早起きすること、
ヘビー級の1週間を始めるトレーニング。

そして、電車は轟音を響かせて突き進み、車はキーキー音を立て、
仕事が街中を行進する。
通りという通りはどこも操業と商売の音が反響し、
そして、巨額の金が膨れ上がって、秘密の帳簿に入っていく。
—しかし、労働者の収支記載帳に入ることは決してない。

日曜日に聴いた流行歌がまだ耳に残っていて、
給料のことなど考えたくない。
—しがないサラリーマンの月曜日は、
昼間は言い争いをして、夕方には全然予定がない。

モーターだけがガラガラ音を立て、ハンマーの地響きがする。
仕事の一日は中断することなく過ぎていく。
芝居が心をそそる。贅沢が嘲笑する。
だが、とうに諦めることには慣れっこじゃないか。
—金のないやつは、いい子で家にいることさ。

月曜日は財布さえからっぽで、
社員食堂なら、かろうじてなんとかなる。
閉店時間からずいぶん経って、泣く泣く
行きつけのカフェを諦めて通り過ぎる。

こうして時間は流れ、一日は消え去り、
疲れて自分の部屋にうづくまる。
すると、つい考えてしまう— どうしてこうなるんだ…
時代がちょっと狂っていると思う。
そして自問する。いったいこうしたことはどうしたら終わるのかと。

月曜日はカレンダーの継子であり、
陰鬱な1週間の灰色の玄関口、
各曜日が歌う合唱のなかの最悪の不協和音、
喜びを与えてくれるお方が実に厳格に守る休業日だ。

ヴァイマル時代に導入された8時間労働制により、残業に対しては超過勤務が支払われるようになった。そのほかにも失業者救済基金の創設、俸給生活者の福祉を保障する傷病保険制度の改良といった諸政策が実行に移された。¹⁶⁾ 次の「病気証明書」は、就労者が罹患した場合に医師の診断書を提出すれば病気休暇を取得できるという社会保障制度が背景にある。

だから病気になれば、堂々と欠勤できる。しかしがむしゃらに働くことが当たり前であれば、罪悪感を感じないではない。働く者のそんな心理と、就労中には知ることもなかった週日の日中に普段起こる出来事が、多くは聴覚を通して新鮮に描かれる。

病気証明書

首に湿布を巻いて、ベッドに横になっている、
ぐったりと青白い顔でよろよろと階段を昇った。
この建物のみんなの関心の的になり、
それで、熱を測るよう気遣ってくれる人がいる。
今日はオフィスを欠勤。—「病気に罹りました」

柔らかくて白い枕は気持ちがいい。
—時々、体のどこかが痛む—
そしてこの痛みが、やましさをなだめてくれる
今日はともかく自分の職務を果たさなくてもいいのだと。
…それに加えて、発汗を促すニワトコ茶が良心のとがめを贖ってくれる。

家具やカーテンをじっと見る。
—自分の部屋は夜しか知らない—。
陽が射して明るい昼間には、
稼ぐために、どこかよそにいる。
そして晩には、もう太陽の光はない。

窓を通して通行人の声が聞こえてくる
そして大ベルリンの午前中の喧噪が。
友人や知人が見舞いに来る。
日に二度、親戚がやって来て、
そして薬は日に三度…

だいたい 11 時頃にボレの鐘の音が聞こえ、
時々、建物入り口のベルが鳴る。
行商人がエジプト綿のソックスを勤める—。
中庭から刃物研ぎの呼び声が響いてくる
そして手回しオルガン弾きもまた来ている。

自分はベッドに伏せっている。それでも外は「生命が躍動している」
—小説のなかですごく素晴らしく描写されているように。
この押しつけに喜んで従ってきた
だから少し抵抗を感じながらも元気になるつもり、
子どもの頃に里帰りしたみたいに…

ベルリンでは、市の西部や南西部の郊外には富裕層が暮らし、北部や旧市内は安い集合住宅が集まる労働者街になっていた。カレコの両親も旧市街に住み着き、彼女は労働者たちの生活を共感の目で観察した。この詩の第 5 連には、労働者街の日常でよく見られる一コマが描きこまれている。

11 時頃に鳴るボレの鐘は、当時手広く牛乳や乳製品の生産・販売をしていたカール・ボレの販売車の到着を知らせる合図だった。ボレは 19 世紀末にベルリンで開業し、1881 年から馬車を使ってベルリン市内に毎日新鮮な牛乳を供給したが、20 世紀初頭には、馭者の若者と販売係の若い女性は、ベルリンの町の愛される情景の一部になっていた。¹⁷⁾

この連に出てくる行商人と刃物研ぎは比較的広い範囲で家々を渡り歩くという意味で共通している。前者は玄関先で商品を売り、後者は刃物類を研ぐという技術を売った。人種的差別や貧しさゆえに放浪しながら稼ぐ長い歴史のある職業だった。行商人の典型的な商品は、針や糸、ボタンやリボンなどの裁縫用品、センセーショナルな内容の通俗本、そのほかこの詩にも出てくるソックス類だった。19 世紀末に両者とも従事者数は最も多くなるが、再度その数が上昇するのは 1920 年代から 30 年代だった。経済的危機から大量の失業者が出たことで、生活のために「路上で」なんとか働かなければならなかった。¹⁸⁾

オルガン弾きもカレコの詩では、同じ意味合いをもつ。19 世紀後半に手回しオルガン弾きの数は増え続けた。ベルリンはドイツにおける手回しオルガン製造の中心地のひとつだった。3,000 人のオルガン弾きがベルリンの通りや集合住宅の裏庭を回り、1920 年代までに大都市の見慣れた景色の一部になっていた。手回しオルガン弾きが中庭や奥庭で音楽を始めると、集合住宅の住人が窓を開けて音楽と歌を聞いた。演奏が終わると、グロッシェン硬貨を紙に包んで投げ落とした。しかし、30 年代にはオルガン弾きの姿は徐々に

消えつつあった。大都市の騒音でオルガン弾きの音楽も歌も聞こえなかったし、家では徐々にラジオやレコードで音楽を楽しむようになっていた。¹⁹⁾しかしカレコの集合住宅には、行商人や刃物研ぎと同じように、生活のためにオルガン弾きがたびたびやってくる。

詩の主人公は最後に、厳しいけれど活力に溢れる元の仕事の世界に戻るために健康になろうと思う。窓から聞こえてくる、失業して不本意な仕事をする人々の姿と比較して、まだずっと恵まれている自分を思ったからかもしれない。

次の「日曜日の朝」には、日曜日は休日という労働者の権利を享受できる喜びが素直に歌いあげられている。

日曜日は仕事に行く必要がない。大都市の週日の騒音はまったく消え、警官も退屈で夢を見ている。Sバーンの走り方さえ、日曜日には週日とは違って見える。教会に出かけるために晴れ着を着る人。広告がぎっしり入った分厚い日曜日の朝刊。目覚まし時計は遅刻しないようせつついたりしない。台所で仕事をしていても、日曜日なら歌も歌いたくなる。蓄音機でダンス音楽を楽しむ人。無為に、ただ日光を浴びる幸せがある。

日曜日の朝

通りは眠そうなあくびをして、ぐずぐずしている。
博物館のごとく沈黙して工場は眠っている。
保安警察官が刑法の一条項の夢をみていて、
そしてどこかで誰かが音楽を演奏している。

Sバーンは、楽しんでいるかのように走り、
人々はハイキングの服を着て気分よく外出する。
まるで電車に乗り遅れそうだと慌てる人々。
今日はその必要はない。— でもそれほど慣れっこなのだ。

商店の窓はしっかり施錠されていて、
まるで人間の目のように十分に睡眠をとっている。—
日曜日の外出着からは、かけたばかりのアイロンの匂いがする。
芽キャベツの香りが家じゅうに広がる。

分厚い朝刊を読み

それから明日からどんな売り出しがあるか目を通す。

時計が静かにチクタク鳴っている。— 蛇口から水のジャージャーという音が聞こえ、それに合わせて女の子が甲高い声で愛の歌を歌っている。

バルコニーに座って光に包まれる。

遠くの蓄音機からキーキーとタンゴが聞こえてくる…

新しいソバカスができる

それでもいい気持ち。—これは殿様の日だ！

次の「大都市の恋」は、新しい時代の若者の自由恋愛を描いている。ヴァイマル共和国の自由な空気のなかで、ベルリンにはショートカットでミニスカートやズボンをはいて男性のエスコートなしに街を闊歩し、自分で稼いだ給料で映画を楽しみダンスホールへ出かけるホワイトカラーの「新しい女性」が出現した。伝統的なジェンダー観をもつ世代にはセンセーショナルに見える「新しい女性」たちの実際はどうだったのだろうか。

就労可能な女性の人口に対する就労女性の割合は、1925年には35%に達した。同年の女性就労者数は220万人で、190万人が工場労働者だったが、ヴァイマル時代の特徴は、女性事務職員や店員の急激な増加だった。07年から33年までに工業分野では約5倍、商業分野では約2.2倍になった。25年時点で工業分野での事務職の約3分の1、商業分野では45%が女性だった。そのため、事務職員は女性の典型的な職種と見られた。さらに年齢も、女性職員の65%が25歳以下で、ほとんどは未婚だった。目立つ職種はタイプピスト、電話交換手、百貨店の店員だったが、店員の年齢はさらに若く、半分以上が20歳以下だった。²⁰⁾

1920年代末、25歳以下の女性事務職の月収は160マルク以下で、男性の月収の60～75%程度だった。そこから10～15%の税金と社会保障費が引かれた。住居費、食費、衣服や化粧品代、交通費を差し引けば赤字となる。²¹⁾そのため、親元で暮らすか、親元を離れたければ間借りをするしかなかった。親元で暮らす場合は、仕事後にさらに家事手伝いが期待されたが、一人暮らしであれば、8時ごろには自由時間が持てた。週末は、どちらのケースも自分で稼いだお金で映画館やダンスホールに出かけ、ウィンドウショッピングを楽しみ、スポーツ観戦やハイキングをして、ささやかな「自由」を味わった。つまり「新しい女性」は新たな現象ではあったが、第一次世界大戦以前には見られなかった「自立した女性」を意味したわけではなかった。

大都市の恋

どこかで、ほんのちょっと知り合いになって
そして、あるときからデートが始まる。
なにかに、一はつきりとは言えないけど一
つられて、もう決して別れられなくなる。
二度目にラズベリー・アイスクリームを食べたときから、お互いの名前呼び合う関係になる。

好き合っていると、退屈な昼間に
もう楽しい夕方の時間のときめきを予感する。
日常生活の不安や苦勞を分かち合い、
加給の喜びを分かち合い、
…その他のことは電話で済ます。一

大都市の通りの雑踏のなかで待ち合わせる。
自宅で会うことはできない。間借りだから。
一疾駆する車や騒音が入り乱れたなかを、
一おばさんたちのおしゃべりを耳にしながら
二人で黙ったまま、体も触れず歩いて行く。

時々だれもないベンチでキスをする、
一あるいは手こぎボートの上で。
セックスは日曜日に限定しなければならない。
一これからのことを今から考える人なんているだろうか。
話は具体的で、顔を赤らめることなどめったにない。

バラや水仙を贈り合うことはないし、
結婚の申し込みの使者を家に送り合うこともない。
一週末のハイキングとキスがもうたくさんなら、
お互いに国営郵便を使って知らせればいい
速記文字で一言、「お仕舞い！」って。

行きずりに若い男性と知り合って、すぐに親密な関係になる。お金がないからデートはアイスクリームを食べ、大都会の喧騒のなかを歩きながら話をする。話足りないときは、電話を使う。味気ない昼間の仕事をする身には、仕事の苦労やちょっとした昇給の喜びを分かち合える相手との心躍る時間がないと生きていけない。間借りでは、異性を部屋に連れ込むことは禁止されているから、セックスは週末に自然のなかで楽しむ。恥じらいなど感じないし、花を贈られるロマンチックな関係ではない。結婚を前提として交際の許しを双方の両親からもらうといった前近代的なプロセスは崩壊している。

男女のつながりは大都市の無味乾燥な毎日の仕事の慰めだったはずなのに、相手に飽きてしまえば、後腐れのないように顔も見ずに電報で冷徹な一言を送り付けて決着する。これが、現代の現実的流儀というわけである。

4. 困難な社会状況

1924年以降のドイツにおける相対的安定期である「黄金の20年代」は29年の世界恐慌によって終わりを告げる。アメリカ資本に依存していたドイツは、真っ先に経済危機の影響を受けた。30年初頭の失業者数は350万人だったが、その年末には400万人に、31年には500万人、32年には620万人（就労者の3人に1人が失業している計算で、過去最高値）にまで急増した。²²⁾ ちょうどこの時期の総選挙でナチ党は躍進した。28年5月の選挙の12議席から30年9月には107議席に伸ばし、32年7月の総選挙では230議席でついに第一党となった。²³⁾ そして33年1月にヒトラー内閣は成立する。

「集合住宅ホーフゼンガーの中庭歌手の瞑想」に失業中の若者の絶望と悲哀が描かれている。「ホーフゼンガー」は本来、宮廷おかかえ歌手を意味する。ホーフは同音異議語として「中庭」の意味がある。中庭は、通りに面した集合住宅と奥に建つ集合住宅に囲まれた空間のことで、ときには奥の建物の1階に通路があって、さらに次の中庭に続いている場合もベルリンの集合住宅には見られた。中庭には、大きなゴミバケツがいくつもあり、大型の洗濯物を干す集合住宅の共有の空間であり、子どもたちの遊び場でもあった。「宮廷歌手」をもじって、主人公の若者を「中庭歌手」とアイロニカルに命名することで、救いようのない状況が際立つ。

ホーフゼンガー
集合住宅の中庭歌手の瞑想

かつて家には応接間があって、ピアノと絹張のソファが揃っていた。
…そもそも私は上流家庭の出身だ。
しかし今では、台所手伝いの女の子たちの
窓際の拍手とこの建物の住人たちがくれるわずかなお金で暮らしている。

私は燕尾服を持っていて、確かな勤め口が決まっていた。
大銀行にね。その銀行が倒産して久しい。
もう少しで私がアピトゥーアの卒業資格を得る時だった。
だけどほかならぬ歌の才能には恵まれていなかった。

私は一度も、知らない集合住宅の中庭には行ったことはない、
そんなことは母が決して許さなかつただろう。
私がゴミバケツと絨毯乾し竿の間で
独りぼっちで、忘れ去られ、埃にまみれて働くことも。

…それは最初の人生の区切りだった。階段の昇り降りの代表選手。
知らない人たちはドアをバタンと閉めた。友人たちは控えめに感謝してくれた。
中庭に一人きりで、そこに立つことがどんなことか、
その人たちみんなには分かりっこない。それに窓はどれも沈黙している。

来た道に戻り、上階へ、それは日に日に辛くなる。
運命は私を謝絶した。
期待することは性格上の欠陥で、
賢く早めに改めるのがいい。

…時折私は昔にひどく憧れる。
—30歳でくたばるわけにはいかないじゃないか。
もう一度、職を得て、
決まったガールフレンドを持ち、そしてウールのコートを着なくては…

上流階級に属していたこの若者は大銀行に就職が決まっていた。世界恐慌の煽りを受けて銀行が次々に倒産するのは 1931 年のことだった。仕事を見つけられなければ、「病氣証明書」の手回しオルガン弾きのように、中庭で歌を歌って聴衆の投げ銭で食いつながなければならぬ。歌の勉強をしたわけではないが、歌うのに道具はいらない。しかし、不況の時代には聴衆も冷たい。投げ銭がなければ、階段を昇って自ら物乞いに出かる屈辱に耐えなければならない。恥を忍んで、別の中庭へ出かけていく勇氣はない。

豪邸に住むかつての富裕層も世界恐慌の影響から逃れられなかったことが、次の詩に描かれる。破産して、グランドピアノ、銀器、家財道具を競売にかけざるをえず、自分たちはあて名書きの内職と、空いた部屋を間貸しして生活する。自分たちの使える部屋が制限されているから間借り人のような気分になる。この家の娘たちにできることといえば、失業したのであれば国家が保障する失業保険を受け取れる、あるいはまだ求人があれば、タイプライター嬢や百貨店の売り子のような安月給の仕事に就けるかもしれない、結婚するという手もあるが、それも相手が職をもっていればのこと。化粧をして着飾って歓楽街に出かけたのも今は昔となった、悪夢の現実である。

「りっぱなお屋敷」

そのりっぱなお屋敷の外観は

昔のまま、悪趣味にあふれ、ぞっとするような俗悪さが目立っている。

— 内部に詳しいのは、現金書留配達人より
執行官だ。

スタンドグラスに描かれた中世の姫たちは

身をくねらせたり、花嫁の花冠を編んだりしている。

… 最後に残った戦前の優雅さ。

— 屋敷のなかでは、あて名書きで生計を立てている。

伝来の磨かれた銀器が競売に掛けられる。

ベヒシュタインのグランドピアノとの別れに涙した。

殺風景な部屋が硬直している。— そして貧乏になった人々は、
自分の家に間借りしているような気持ちになる。

勤労学生が談話室に宿泊している。

郵便局員は「ピーダーマイアー様式の部屋」に住んでいる。

貧困がルイ 15 世様式の寝椅子にうずくまっている。

— そして昼食には目玉焼きがせいぜい。

娘たちは失業保険金をもらいに行くか、タイプライターを打ちに行く。

マネキン・ガールになる者もいれば、花嫁になるだけの者もいる…

お茶と乾燥した小さなパンで暮らすのは難しい。

母たちはそれでも年老いて名誉を得られたのに。

そして夜に、どぎつい電光広告に誘われて、

彼女たちは人目をしのいで街のほうを眺める。

— りっぱなお屋敷に住んでいるというのに

そして先日まで自分自身がまだ上流のレディーだったのだ。

… 以前はまだ指にマニキュアをしていた

そして評判も高かった。— でもそれからだいぶ経つ。

元日からは門衛ですらもう挨拶してこない。

— もう終わり…

最後に、世界恐慌後の厳しい社会におけるあからさまな経済格差と、決して貧困層を理解し共感することのない分断された支配層を描く詩を読んでみよう。

金持ちの子どもたち

彼らは何一つ知らない、不潔なものや住宅難について、

失業保険の受給や貧窮者の給食について。

彼らは全く想像もできない、街路から奥まった建物の悪臭や、

飢餓賃金や干からびたパンのことを。

彼らの住まいは、たいていは高級な家で、

時には庭園に囲まれたエレガントな邸宅のこともある。

彼らは決して居酒屋や小料理屋へ行くことはない、

それに常に子守を伴わなければ外出しない。

彼らは、もう今から上流社会に属していて、
そして貧困を最大の罪と見なしている。

— 一台も車ないの…？ありません、彼らはそれをどう思っているのか！
彼らの高慢はパパが所有する大金で膨らんでゆく。

彼らは普通、アビトゥーアの卒業資格を取って社会に出てゆく、
—でも少なくとも、もう推薦状を持って—
そしてそこから最終的結論を導き出す。
私たちが雇い主なのだ、なぜなら富はわたしたちのものだから。

14歳にして彼らは思う、貧しい人々の運は
たしかに良くない。だが誇張されている — —。
早くも14歳にして！—彼らが未だしも14歳でいてくれたら。
しかし子どもたちは、やがて大人になる…

おわりに

1933年1月にナチスが政権を取ると、ユダヤ人や反ナチズムの知識人、学者、芸術家たちがドイツから大量に脱出し始めた。その年の4月には突撃隊によるユダヤ人商店のポイコットが実施され、35年のニュルンベルク法はユダヤ人から公民権を剥奪し、ドイツ人との結婚・内縁関係を禁じた。

それでも、カレコは自らの非政治性を根拠にドイツ国内にとどまっていた。彼女がユダヤ人であることがナチ党に知れ、37年1月の「有害で望ましくない書籍リスト」に彼女の本が載って以降、著作の出版・販売は禁止され、著述活動はユダヤ人のなかだけに限定された。38年には、ユダヤ人の財産公開、ユダヤ人の子どもと遊ぶことの禁止、ユダヤ人医師の開業禁止、少年にはイスラエル、少女にはサラという名を添えることなど更なる制限がユダヤ人に加えられた。

私生活をみると²⁴⁾、カレコのすぐ下の妹レアは結婚してドイツに残ったが、両親と2人の妹と弟は1933年にドイツを去り、パリで書類が整うのを待って35年にテルアビブに移住した。カレコも35年と38年にパレスチナの両親を訪ねている。パレスチナから戻ると、アメリカ移住の準備が急ピッチで始まる。カレコは、36年12月に息子エプヤタル・アレクサンダー・ミヒャエルを出産するが、38年1月に離婚。同年6月に作曲家で音楽

学者ケムヨ・ヴィナヴェルと結婚する。息子の父親はヴィナヴェルだった。マシャは離婚後も最初の夫の名前をペンネームとして使い続けた。

ヴィナヴェルは1895年にワルシャワの有名なユダヤ人一家に生まれ、ベルリンの大学で音楽を学び1926年に国立音楽専門大学の指揮者としてコンサートデビューを果たしている。33年にオペラ座から解雇された30人のユダヤ人歌手を集めてヴィナヴェル合唱団を設立して、ユダヤ音楽をレパートリーとするコンサートをユダヤ教区で開催し、ドイツ諸都市を演奏旅行している。一家はついに38年9月にニューヨークに向けてドイツを後にする。

1938年11月9日から10日未明にかけて起こった「水晶の夜」は、突撃隊がユダヤ人の住宅やユダヤ教の会堂シナゴグを襲撃、放火した迫害事件だった。マシャ・カレコと家族のドイツ脱出は、生死を分けるぎりぎりのタイミングだった。

詩作品の出典

『叙情的速記ノート 日常についての詩』*Das lyrische Stenogrammheft Verse vom Alltag*, in *Mascha KALÉKO Sämtliche Werke und Briefe*, Bd I Werke, Hrsg. u. komm. von Jutta Rosenkranz, dtv, 2013. ※各詩のタイトル末のカッコ内の数字はページ数

〈月曜日の朝から週末まで Vom Montag früh bis Wochenende〉

私自身にインタビュー Interview mit mir selbst (11)

月曜日のシャンソン Chanson vom Montag (12)

病気証明書 Krankgeschrieben (16)

終業後の帰宅 Heimwärts nach Ladenschluß (17-18)

小市民の死 Ein kleiner Mann stirbt (21-22)

大都会の恋 Großstadtliebe (22-23)

金持ちの子どもたち Kinder reicher Leute (24)

集合住宅の中庭歌手の瞑想 Meditation eines Hof-Sängers (25)

記念教会の7月の夜 Julinacht an der Gedächtniskirche (33)

〈カレンダーの赤い数字 Rote Zahlen im Kalender〉

日曜日の朝 Sonntagmorgen (37)

〈ブラッシュ張りのソファと飾り戸棚 Plüschsofa und Vertikow〉

「りっぱなお屋敷」“Herrschaftliche Häuser” (74-75)

『大人のための小読本 韻を踏んだものと踏まないもの』*Kleines Lesebuch für Große. Gereimtes und Ungereimtes*, in ebd.

〈II 実家と青春時代について Römisch Zwei Von Elternhaus und Jugendzeit〉

「カインバーン通り」“Keinbahnstraße” (121)

註

- 1) 失業率の変化については、「ヴァイマル共和政」のなかの「ルール占領とインフレーション」および「黄金の20年代」を参照。<https://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%83%B4%E3%82%A1%E3%82%A4%E3%83%9E%E3%83%AB%E5%85%B1%E5%92%8C%E6%94%BF> [2024年12月2日アクセス]
- 2) ピーター・ゲイ『ワイマール文化』亀嶋庸一訳、みすず書房、1989年、161頁。
- 3) 失業者数については、マシュー・セリグマン / ジョン・ダヴィソン / ジョン・マクドナルド『写真で見るヒトラー政権下の人びとと日常』松尾恭子訳、原書房、2010年、202-205頁参照。
- 4) カレコの伝記については、以下を参照。Jutta Rosenkranz, *Mascha Kaléko*, Deutscher Taschenbuch Verlag (München), 2012, S.15-62.
- 5) 1881年から1914年までに250万人のユダヤ人がロシアで始まった迫害から西欧へ逃れた。大多数はハンブルク、ブレーメン経由でアメリカや一部イギリスへと移住したが、ドイツに留まった者は10万人を超えた。大澤武男『ユダヤ人 最後の楽園 ワイマール共和国の光と影』講談社現代新書、2008年、27頁。
- 6) “Mädchen an der Schreibmaschine,” in *Kleines Lesebuch für Große. Gereimtes und Ungereimtes*, in *Mascha KALÉKO Sämtliche Werke und Briefe*, Bd I Werke, S.127-129.
- 7) ロマーニッシュェス・カフェの詳細については、ユルゲン・シェベラ『ベルリンのカフェ』和泉雅人・矢野久訳、大修館書店、2000年、第2章「創造的精神の待合室ーロマーニッシュェス・カフェー」を参照。
- 8) 両詩とも『叙情的速記ノート』に収録されている。後者のタイトルは「階段の踊り場での噂話」に変更されている。
- 9) この段落のデータについては、以下を参照。成瀬治、山田金吾、木村精二編『ドイツ史 3 1890年▶現在』山川出版、1991年、71頁、“Groß-Berlin,” *Wikipedia* (<https://de.wikipedia.org/wiki/Gro%C3%9F-Berlin>) [2024年12月11日アクセス]
- 10) “Verkaufsautomat,” *Wikipedia* (<https://de.wikipedia.org/wiki/Verkaufsautomat>) 参照 [2024年12月11日アクセス]
- 11) シェベラ、前掲書、8頁。
- 12) バジル・ケアリとノルベルト・ジャックについては、以下を参照。“Basil Carey Bibliography,” (<http://www.classiccrimefiction.com/basil-carey.htm>), “Norbert Jacques,” (<https://www.autorenlexikon.lu/page/author/342/3421/DEU/index.html>) [両方とも2024年12月13日アクセス]
- 13) マンフレート・ゲルテマーカー / プロイセン文化財団映像資料館編『ヴァイマル イン ベルリン ある時代のポートレート』岡田啓美、齋藤尚子、茂幾保代、渡邊芳子訳、三元社、2012年、38頁。
- 14) 同書、40頁。
- 15) 劇場、カバレット、カフェ、映画館の軒数については、以下を参照。シェベラ、前掲書、8頁および12頁。
- 16) 成瀬ほか、前掲書、163頁、および、リタ・タルマン『ヴァイマル共和国』長谷川公昭訳、白水社（文庫クセジュ）、2003年、14頁。
- 17) ボレについては以下を参照。“Meierei C. Bolle,” *Wikipedia*, (https://de.wikipedia.org/wiki/Meierei_C._Bolle) [2024年12月21日アクセス]
- 18) 行商人と刃物研ぎについては、以下を参照。“Hausierer,” *Wikipedia*, (<https://de.wikipedia.org/wiki/Hausierer>), “Scherenschleifer,” *Wikipedia*, (<https://de.wikipedia.org/wiki/Scherenschleifer>) [両方とも2024年12月23日アクセス]

- 19) 手回しオルガン弾きについては、以下を参照。“Drehorgelspieler,” *Wikipedia*, (<https://de.wikipedia.org/wiki/Drehorgelspieler>) [2024年12月23日アクセス]
- 20) この段落の女性就労者数に関するデータについては、以下を参照。斎藤哲『消費生活と女性ドイツ社会史（1920～70年）の一側面』日本経済評論社、2007年、38-39頁。
- 21) 女性の収入については、同書、40頁、ゲルテマーカー、前掲書、86頁、および田丸理砂『「女の子」という運動　ワイマール共和国末期のモダンガール』春風社、2015年、57頁を参照。
- 22) 失業者数については、註3）を参照。
- 23) 総選挙におけるナチ党の議席数については、以下を参照。若尾祐司 / 井上茂子編著『近代ドイツの歴史—18世紀から現代まで—』ミネルヴァ書房、2005年、211および213頁。
- 24) Rosenkranz, a.a.O., S.61-69.